慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	老年期 : 不安を中心として
Sub Title	A study of senescence, with especial reference to its major anxiety
Author	荒井, 保男(Arai, Yasuo)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1965
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.5 (1965.) ,p.69- 79
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069 57X-00000005-0069

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

老　年　期

——不安を中心として——

A Study of Senescence, with especial reference to its Major Anxiety

荒　井　保　男
Yasuo Arai

ば じ め に

「人生僅か五十年」と云ったのは今は昔，医学の進歩は，人類の平均寿命の著しい延長をもたらし，人口の老令化に伴い，Gerontlogy の当達も亦，めざましいものがあるが，老人に真の life を与えるためには，医学研究と相俟って，老年期心理の研究が必要であろう。

老人の不安と欲求を知ることなくして，老人を満足せしむる社会保障の確立は，求め得べくもないであろうと思われる。

しかも，老人の心理を論ずる場合，一方に身体的な老化現象と云うものを踏まえ，他方に心理的社会的な面を踏まえて，両面から追求してゆかなければならない。

私はかかる立場から，高年者の身体的変化を捉え乍ら，老人の心理を観察して来たが，老年期は青年期と同様，苦悩に満てる時期であり，老人を悩めるものとして，<苦悩——不安>を中心に捉えようと試みて来た。

今回は，それらを中心に述べてみたいと思う。

第一章　四十才前後の心性

(一) 緒　言

私[16]はさきに，老人に Rorschach-test を行い，老人が孤立化して行く傾向と，外界に対する感受性を失い，世界を自分自身の価値と欲求で，再構成しようとしていることについて述べ，更に，Taylor の manifest anxiety scale を老人に施行し，不安が知識と関係深いことを論じ，その際，Taylor の manifest anxiety scale は老年期不安の測定には不適当であり，経済的，家庭的内容を織り込んだ尺度の必要性を述べておいた。

そこで私は，以上の経験と，実際の臨床体験から，35項目より成る質問紙を作製し，老年期不安の解明を試みようとした所，意外にも，四十才前後の心性の特性を見出す結果となった。

以上，四十才前後の心性につき，若干の考察を加えながら，私の実験成績を報告したいと思う。

(二) 実験対象

横浜市に属するすべての機関（横浜市庁，区役所，市立大学，中学校，高校，大学病院，市立病院，万治病院）に勤務するあらゆる階層の40～70才の老壮年男女 218 名を対象とした。

(三) 実験方法

先に述べた如く Rorschach test や manifest anxiety scale を老人に施行した成績と臨床経験から，35項目よりなる質問紙を作製し，「ハイ」「イイエ」を以て解答せしめ，得られた結果につき検討を加えた。

作製した質問内容は次に示す如くである。

1. 自分が一人ぼっちだと感じる。
2. 注意の集中が困難である。
3. いらいらするようになった。
4. 寝つき悪く，寝おきにさっぱりしない。
5. 物忘れが多くなった。
6. 身体の衰えが気になる。
7. 仕事がたいして面白くない。
8. ふきげんになり勝ちだ。
9. 朝早く目をさます。

10. 以前にくらべて物おぼえが良くない。
11. 他人の悪意がなければ，もっと良くいくと思う。
12. 将来の経済生活に不安がある。
13. こんきがなくなって来た。
14. ささいなことに腹を立ててしまう。
15. 頭が重い。
16. 軽い気持で，でまかせを云う。
17. 不正なことをして得をしようとする人が多い。
18. 私の家庭は楽しくない。
19. つかれた気持が何時もある。
20. 家の中で気にさわると皆を叱る。
21. めまいがする。
22. 若い者に押され勝ちである。
23. 誰も信用しない方が無難だと思う。
24. 精神的な重荷が多くなる。
25. 世の中の，ほとんどのことは自分と関係ない。
26. 強情になって来た。
27. 時に耳鳴りがする。
28. 頭の働きが，何時もよりにぶくなるときがある。
29. 誰もが私のことなど考えてくれない。
30. 話し相手がほしいと思う。
31. これからやりとげたい理想はない。
32. 私のことは，かまって貰いたくない。
33. 夜急に不安になって，目をさますことがある。
34. 昔のことを良く思い出す。
35. 年をとるにつれて，人間はじゃまにされる。

（四） 実験成績並びに考察

年令のすすむにつれて，これら質問項目に対する反応がどう異なってゆくのであろうか，年令差をみるべく，これら35項目より得た成績を40～45才の group と55～70才の group とに分け，統計的処理を行った所，両者の間に統計的有意差の認められたのは表 1，2，3，4，5 に示す如く，

3. いらいらするようになった（$P<0.05$）
8. 不気嫌になり勝ちだ（$P<0.01$）
9. 朝早く目をさます（$P<0.05$）
14. ささいなことにすぐ腹を立ててしまう（$P<0.05$）
20. 家の中で気にさわると皆を叱る（$P<0.05$）

の 5 項目であった。

つまり「目を早くさます」は 55～70 才に多く「いらいらする」「不気嫌になり勝ち」でささいなことに腹を立て易いのは 40～45 才のものが多い。朝早く目をさますのは老化現象の招来を意味するものであろう。40～50 才に不気嫌で腹立て易いのは，この時期が身体的変調期にあると云う身体的理由によるのであろうが，この年代は自己が社会的にも，経済的にも，欲求不満の強烈な時期であることを示すものであろうと思う。

Table 1.　いらいらするようになった

年令＼解答	は　い	いいえ	計
40～45	34	48	82
55～70	18	49	67
計	52	97	149

Table 2.　ふきげんになり勝ちだ

年令＼解答	は　い	いいえ	計
40～45	83	49	82
55～70	10	57	67
計	43	106	147

Table 3.　朝早く目をさます

年令＼解答	は　い	いいえ	計
40～45	35	47	82
55～70	46	21	67
計	81	69	149

Table 4.　ささいな事に腹を立てる

年令＼解答	は　い	いいえ	計
40～45	36	46	82
55～70	17	50	67
計	53	96	147

Table 5.　家の中で気にさわると皆を叱る

年令＼解答	は　い	いいえ	計
40～45	37	46	82
55～77	11	56	67
計	47	102	147

額田年教授[6]が，歴史上の人物 250 名につき，不慮の死，外因死つまり

戦死　敗死　陣歿　斬殺　斬死　暗殺　自殺　刑死
獄死　殉死　急死　客死　圧死　毒殺　落馬死　水死

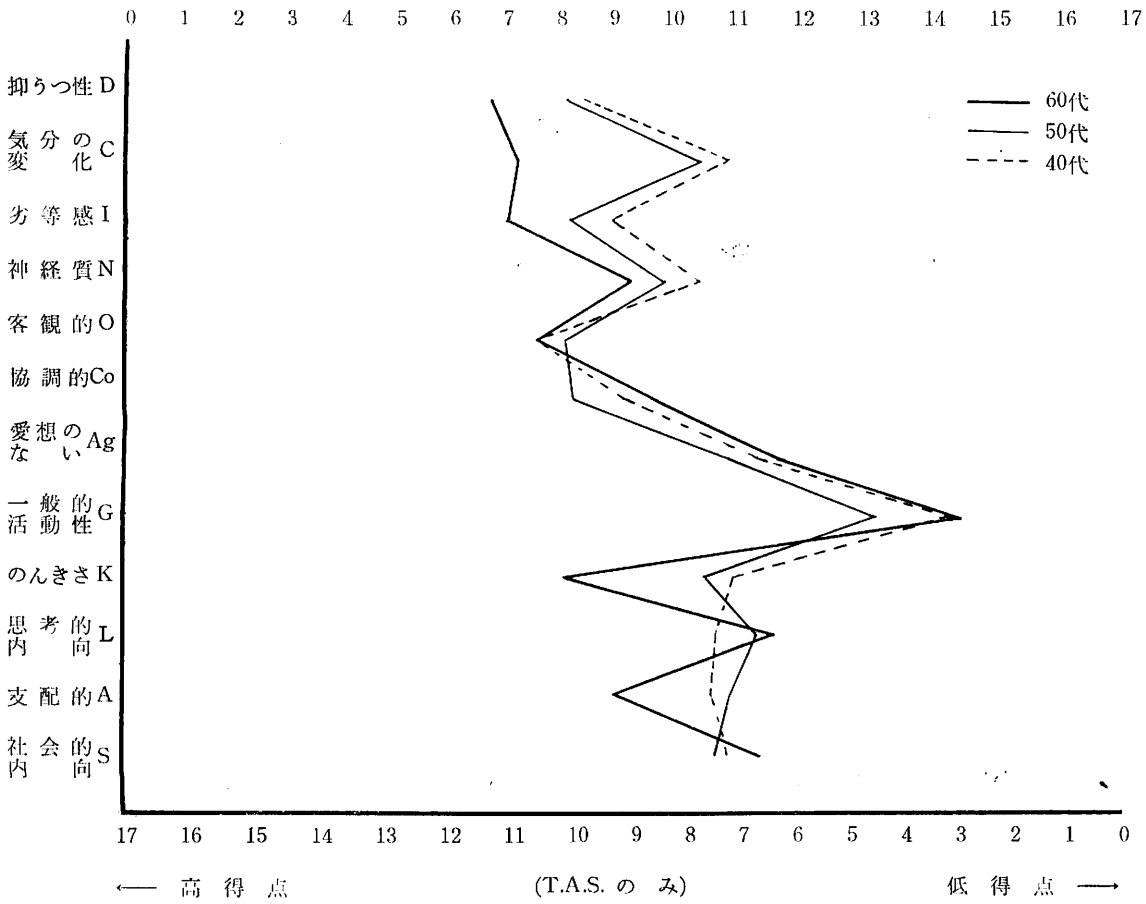

Fig. 1.　Y-G の粗点の平均

等につき，不慮の死（外因死）と年令との関係を調べたところ，どの時代でも，どの職業をみても，死亡年令34.5～45才の間の人が圧倒的に多く，総死亡平均年令をみると 42.1 才であるといい，同教授は，これから考えると40才前後という年令は，一応社会的にも思想的にも自らのものとした信念が固まり，又，それを強く主張する年令であることが，このような死を導いた原因であろうと述べて居られる。私の実験成績と考え合わせ，興味深いものがあるが，40才代は社会的には上の者と下の者との板ばさみにあい，最も社会的に活動する立場にあり乍ら，実は若さの喪失に対する焦慮と相まって，社会的，経済的に強い欲求不満を示す時期なのであろう。その意味で，40～45才は人生の岐路と云い得るかも知れず，世人は之を「厄」と言うのであろうか。

私が高年者に矢田部・Guilford 性格検査を試みた結果も，これを裏書きするようである。

私が 40～49才・51名，50～59才・59名，60～69才・20名の高年者に，矢田部・Guilford 性格検査を試みた結果は，Fig. 1 に示す如くで，40才代が，抑鬱性最も高く，神経質であることが分る。

いらいらし，不気嫌で抑鬱性高いのが，初老期の心的特性の様に思われるが，しかし，図に見る如く，60才代も，「のんき」ではないのであって，何れこれらについては稿を改めて詳述したいが，年令の増加するにつれ，気分の変化少いにもかかわらず，決してのんきではなくなり，たとえ，Aging により，感情の Rigidity 甚しく，一見，感情の動揺なきが如く見えても，内面的には決してのんきではないのである。

然らば，高年者は，如何なる理由のもとに，のんきでなくなるのであろうか。

更に高年者の悩みと，不安を追求してゆかねばならない。

(五) 結　　語

Taylor の manifest anxiety scale や Rorschuch test を老人に施行した実験成績や，実際の臨床経験から，私は35項目よりなる質問紙を作製し，これが質問紙を高年者に施行し，二件法によって得られた結果につき，40～45才のグループと55才以上のグループとに分けて観察し，四十才前後の心性の特性について述べた。

第二章　老年の悩み

(一) 目　　的

前章において，高年者が，「のんきでない」と云うことに触れたが，思うに老年期に於ける Personality の構造の特徴は，主観化とも云い得る[1)2)3)]。そう云う意味に於て，老年期は，青年期と軌を一にするものであり，適応行動の困難な情緒的緊張による Frustration の強い時期と云うことが出来る。

それは又，青年期と同様，苦悩に満ちた時期であり，第二の自我の発見の時期でもある。

死に直面しつつ，生存の意義と目的とを，いやと云う程，考えさせられる時期でもある。

然らば，かかる時期の老人は，如何なる不安と苦悩を有するものであろうか。

老年期の苦悩と不安の解明を，試みようとするのが，本論文の目的とする所である。

(二) 実験対象

第一章に示せる通りであり，対象人員は 40～70 才に至る男女 241 名である。

(三) 実験方法

私は次に示す質問紙を作製し，被験者に解答せしめ，更に面接して，被験者の精神面にも触れるよう努力し乍ら，その解答を再確認し，得られた結果につき検討を加えた。その質問紙は次の通りである。

(イ) 現在あなたが，常に気にかけて居られるものは何ですか，次の項目で適当欄に○印をつけて下さい。

(1) 脳溢血　(2) 癌〈胃癌，肺癌，乳癌，子宮癌，直腸癌，舌癌

(3) 高血圧症，又は動脈硬化症

(4) 食欲がない　(5) 老後の生活が心配

(6) 停年

(7) 公職からの引退

(8) 停年又は退職後の経済問題

(9) 死ぬこと

(10) 自分の生活が，わずらわされること

(11) 配偶者との死別

(12) 老後の依存すべき人のないこと

(13) 孤独になること

(14) 友人の死亡

(15) 社会的活動の出来なくなること

(16) 性欲の減退

(17) 外出の出来なくなること

(18) 太りすぎ

(19) 痩せすぎ

(20) 神経痛

(21) 老後子供が頼りにならないこと

(22) 親孝行の道徳のすたれたこと

(23) その他

(ロ) 現在，あなたが，楽しいと思うことは何ですか，次の項目で適当欄に○印をつけて下さい。

(1) 読書　(2) 庭いぢり　(3) 茶道

(4) 盆栽　(5) 空想すること　(6) 絵画

(7) 書道　(8) 俳句　(9) 短歌

(10) 自分の職務に熱中すること

(11) 社会的活動　(12) 老後の経済的安定

(13) 一人ぼっちになって気ままにすること

(14) 孫の出生　(15) 妻の健康

(16) 宗教的信仰

(17) 公職より退職して悠々自適すること

(18) 旧友隣人との交遊

(19) 家族の人から親切にしてもらうこと

(20) 孤独　(21) 音楽　(22) 登山　(23) 散歩

(24) 自然をたのしむこと

(25) 日日好日の心境

(26) 自己の健康

(四) 実験成績

(イ) 老年の悩み

老人が常に気にかけていることの出現率（反応総数に対する）を 40 才代，50 才代，60 才代の年代別に分類して，図示すれば Fig. 2 の如くである。

フロイドは死の本能を説いたが，直接「死」と云う問題に恐怖を示した人は，60才代になると皆無である。が，この皆無こそ，実は精神分析的解明が必要であろう。事実，脳溢血，癌，高血圧，と云う身体的疾患を恐れているものが，各年代を通じて圧倒的で，間接的に，いかに

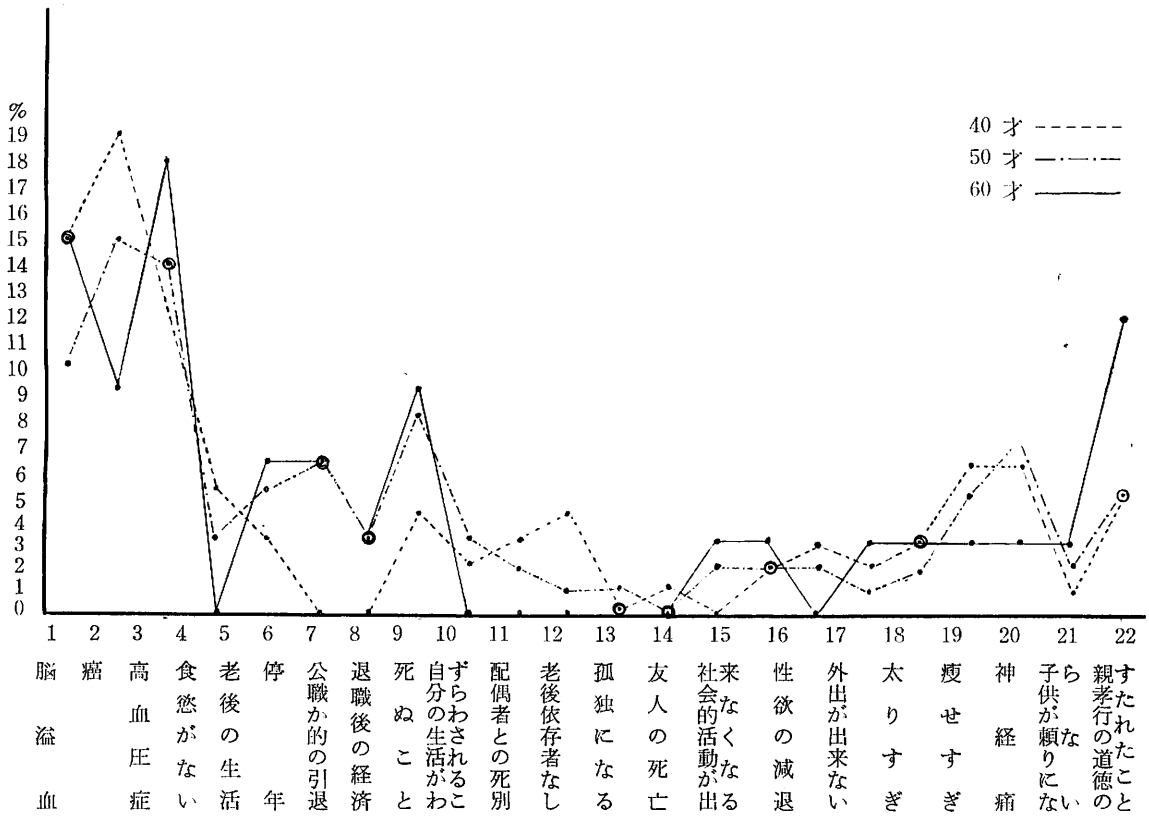

Fig. 2.　老 年 の 悩 み

死を恐れているかを物語るものであろう。事実，私は88才の脳軟化症のある老婆が，死後自分が地獄にゆくか天国にゆくか，常に苦悶して安眠し得ない例を知って居り，この図表から死の不安なしと考えるのは，早計であり，むしろ，死を「気にかけていない」と解答していることこそ，重要性が存在するのではなかろうか。死の不安はさておき，この図表から三つの山を見出すことが出来る。

その①は　身体的疾患を中心とするものであり

その②は　社会活動からの離脱と，退職後の経済問題であり

その③は　親孝行の道徳のすたれたことへの慨嘆を中心とするものである。

圧倒的に多いのは身体的疾患，とくに癌，脳溢血である。

次に公職から引退し，退職後の経済問題を心配するものが多く，40才代，50才代，60才代，年代の進むにつれその傾向が強く，40才代では，むしろ，次の Fig. 3 にみられる如く，退職後の悠々自適を夢みるものが多い。

第3の山として，親孝行の道徳のすたれたことを歎くものが60才代に多く，依存者のいないこと，孤独と言うことを意識的に表現していないが，老後如何に周囲から親しくされることを望んでいるかが推測される。

(ロ)　老年の楽しみ

老年の楽しみを追求することによって逆に老年の悩みを知ろうとして，楽しむことについての出現率（反応総数に対する）を図示すれば，Fig. 3 に示す通りである。高年者は自己の健康を喜び，家族の人から親切にしてもらう事が最大の楽しみであることが，表示されている。

自然にしたしみ，自分の職業に熱中することが楽しみとするものが年代の進むにつれて，多くなる。而して，60才代になると，老後の経済安定を望むものが増加する。

（五）考　　察

以上実験成績の示すところは，青年期の悩みと甚だその趣きを異にしている[2) 4) 11) 14]。青年期のそれは，自分の欠点に就いての悩み，つまり，自分の体力，体質，力

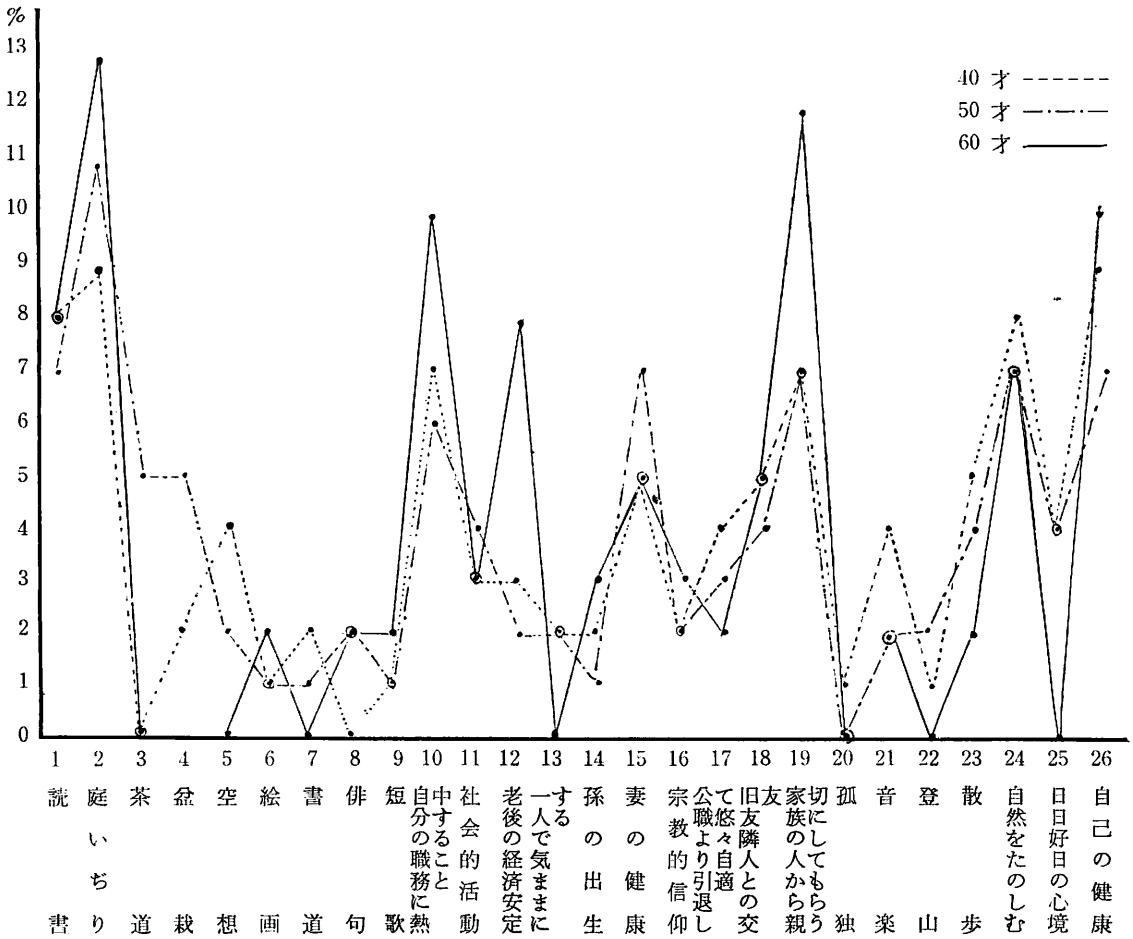

Fig. 3. 老年の楽しみ

量に対する苦悩，が大部分を占める。これに反し，老年はこれら自分の欠点などは，もはや，問題とならず，疾病と老後の経済問題や社会活動からの離脱が最も大きな悩みとなるのである。

「悠々自適したい」等と考えるのは，40才代，50才代の夢であり，60才代以上になると，悠々自適どころか，自分の仕事に熱中することが，最大の喜びであることを知り，公職からの引退が実は，大きな苦しみであることを自覚するようである。

所詮，人間は，社会的動物であり，社会から孤立して生きることは，人間失格を意味するものであろうか。

アリストテレスは，「人」をば単に，孤立人としてではなくて，「社会に於ける人」として把握したことは，周知のことであるが，更に彼は，『自足 (autarkeia) とは独りの人，孤独の生を送る人にとって，足ると云う意味ではなくて，ポリスの人にとって足る，と云うことである[10]』と述べているが，個人は社会を現わすことに於て，はじめて，個人なのであろう。東洋の詩人の詠んだ，山中隠栖の楽しみも実は，東洋の則天去私的理想像と解すべきものであり，それを知ることなくして，単なる悠々自適は40才代の夢なのである。とまれ，社会的身分の喪失，社会からの脱落が如何に苦悩であるかは，実験成績が如実に示す所であろう。

要は，人間は，社会と共にあることこそ，真の喜びなのである。そして，このことは，「老人が一人になったら養老院へ」と云う簡単な社会保障のあり方の間違いを，指摘しているようでもある。老人の社会保障は，年金や，老人ホームで簡単に解決されるものではないのである。

事実，最近イギリスでは，「年老いた人は老人ホームへ」と云う考え方はもはや，古くなりつつあると言う[9]。

つまり，老人を特殊人口視しない方向に向いつつあるそうである。老人を特殊人口視しないためには，まず 高令でさえあれば，皆退職して静かに暮した方が良いと一律にきめないで，個人差を尊重し，とくに，老人の健康が充分労働に意欲があり，社会に貢献したい場合には，できるだけ，生産人口にとどまってもらうことが望ましいのである。

しかし，国が老人の特殊人口視をさけるためには，老後の生活保障の本格的な裏付がなくてはならないが，老人社会保障の問題が本論文の主旨でないので，ここで論ずることを避けねばならない。

（六）結　　語

老年の悩みと楽しみを分析し，老年の悩みとするものは，疾病，経済問題，社会的活動からの離脱であることを述べ，老年期に真の喜びを与える社会保障の在り方にも触れようとした。

第三章　不安と身体的変化

（一）緒　　言

Selye. H. のストレス学説，所謂 Adaptation syndrom の提唱以来，不安の身体に及ぼす影響が，数多く論ぜられて来た。

さて，前章に於て，私は老年期の悩みについて考察して来たが，Selye, H[7] によれば，老年期は Adaptation energy の減退期であると云い，動物実験に於て，これを明らかにしているが，老年期は適応能力の減退期[16]と云うことから推論して，ささいなストレスが，身体に多大の変化を与えるであろうと考えられる。

ところで，「老化とは何か」と云う命題はしばらくおき，実際的に臨床家の立場から，一般に捕捉し易い老化的変化は，血管ことに動脈の変化である。

事実，動脈の変化を追求することに於て，老人病学の最も大きな問題を解明し得ると考えられていることから，私は，臨床的に，動脈の変化を中心にして，不安がこれに及ぼす影響について，考察してみようと思う。

（二）実験対象

前述の通りで，40～70才に至る老壮年男女 247 名である。

（三）実験方法

不安の測定には

（1） Taylor の manifest anxiety scale,

（2） R. B. Cattell の不安診断テストを使用した。

更に，同一被験者に，医学的全身検査を行い，両者の相互関係を追求した。

（四）実験成績

Ⓐ Taylor の manifest anxiety scale と身体的変化

① Taylor の不安得点と，血圧値

今，Taylor の不安得点 20 以上の不安得点以上のものを，不安感情人と考え，最高血圧値との関係を求むれば，Table 6 の如くであり，不安得点と最低血圧値との関係を求むれば，Table 7 の如くである。これを統計的に処理すれば，両者共に，不安と血圧値との間には，何らの有意の関係を見出し得ない。

Table 6.　最高血圧と不安

不安得点＼最高血圧	0～130	131～140	141～150	151～180	181～	計
0～10	14	6	4	10	1	35
11～20	60	19	11	30	5	125
21～30	30	8	8	22	1	69
31～40	12	1		2		15
41～50	1			1	1	3
計	117	34	23	65	8	247

Table 7.　最低血圧と不安

不安得点＼最低血圧	0～90	91～100	101～110	111～120	121～130	131～	計
0～10	22	10	1	1	1		35
11～20	94	19	3	8		1	125
21～30	47	15	4	2	1		69
31～40	14		1				15
41～50	1	1			1		3
計	178	45	9	11	3	1	247

② Taylor の不安得点と，眼底所見

実際的に，生体で血管をかなり細いところまで，直接に見ることが出来るのは，眼底の血管であり，且つ，眼底の血管状態を知ることによって，脳内の血管状態をも知り得て，極めて便利であり，この方面の研究が

進歩しつつあるのが，今，動脈硬化と不安との関係を追求すべく，Keith-Wagener の分類に従い，KW と不安との関係を求めれば Table 8 の如くである。KW Ⅱ度以上を病的と考えて，両者の関係を求むるに，統計的に有意の差を認め得ない。そこで更に，Scheie の分類に従い，眼底高血圧度 (H) と，動脈硬化度 (S) に分け，不安得点と両者の関係を追求してみると，Table 9, 10 の如くであり，動脈硬化所見 (S) と不安との関係は何らの統計的，有意差を認め得ない。眼底高血圧度 (H) と不安得点との間には統計的に処理すれば

$$x^2=1.835 \qquad 0.1<P<0.2$$

であった。

Table 8.　眼底所見と不安

(KW)

不安得点＼(KW)度数	0	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	計
0～10	6	22	7		35
11～20	36	51	34	4	125
21～30	20	35	16		71
31～40	4	8	3		15
41～50	1		2		3
計	67	116	62	4	247

Table 9.　眼底所見(H)と不安

不安得点＼(H)度数	0	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	計
0～10	14	14	6	1	35
11～20	63	36	22	4	125
21～30	33	27	11		71
31～40	8	7			15
41～50	2		1		3
計	120	84	40	5	247

Table 10.　眼底所見(S′)と不安

不安得点＼(S)度数	0	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	計
0～10	11	22	2		35
11～20	48	56	21		125
21～30	29	35	7		71
31～40	5	7	3		15
41～50	1		2		3
計	94	120	35		247

Ⓑ　R. B. Cattell の不安診断テストと身体的変化

次いで R. B. Cattell によって作製された，不安診断テスト(日本版)を用いて，不安と身体変化の関係を追求した。

R. B. Cattell の不安診断テストは Cattell の長年にわたる多くの研究に基いて，作られたもので，臨床診断を補うための質問紙として，又短い時間で出来る調査法として，現在あるものの内，すぐれたものと考えられている。私はこの不安診断テストを用いて，不安得点と，身体的変化の関係を追求した。

老年期心理の特性として「疑い深い」と云うことは，諸家[4) 16)]の報告する所であり，特に，Cattell の不安因子 L（疑い深い，嫉妬深いなどのパラノイド傾向）の得点と，身体的変化との関係を追求した。その結果は Fig. 4, 5, 6 に示す通りで，得点 7 以上を不安群とすれ

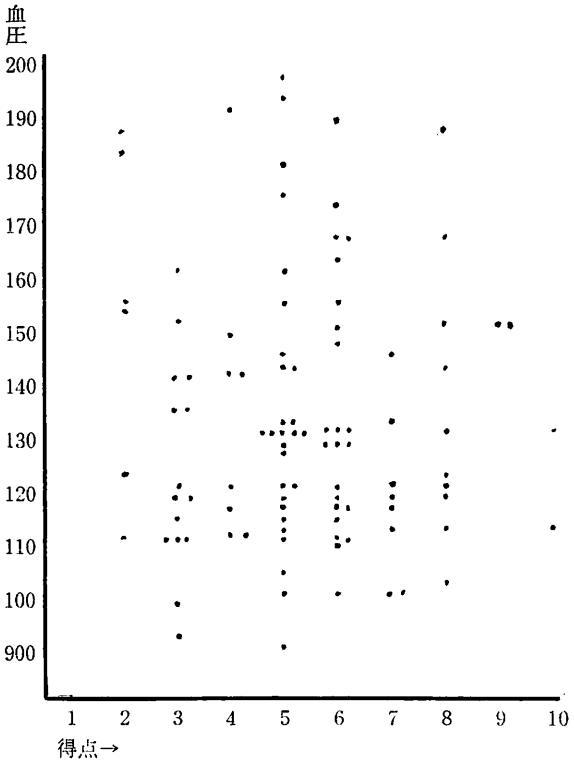

Fig. 4.　因子 L 得点と血圧値

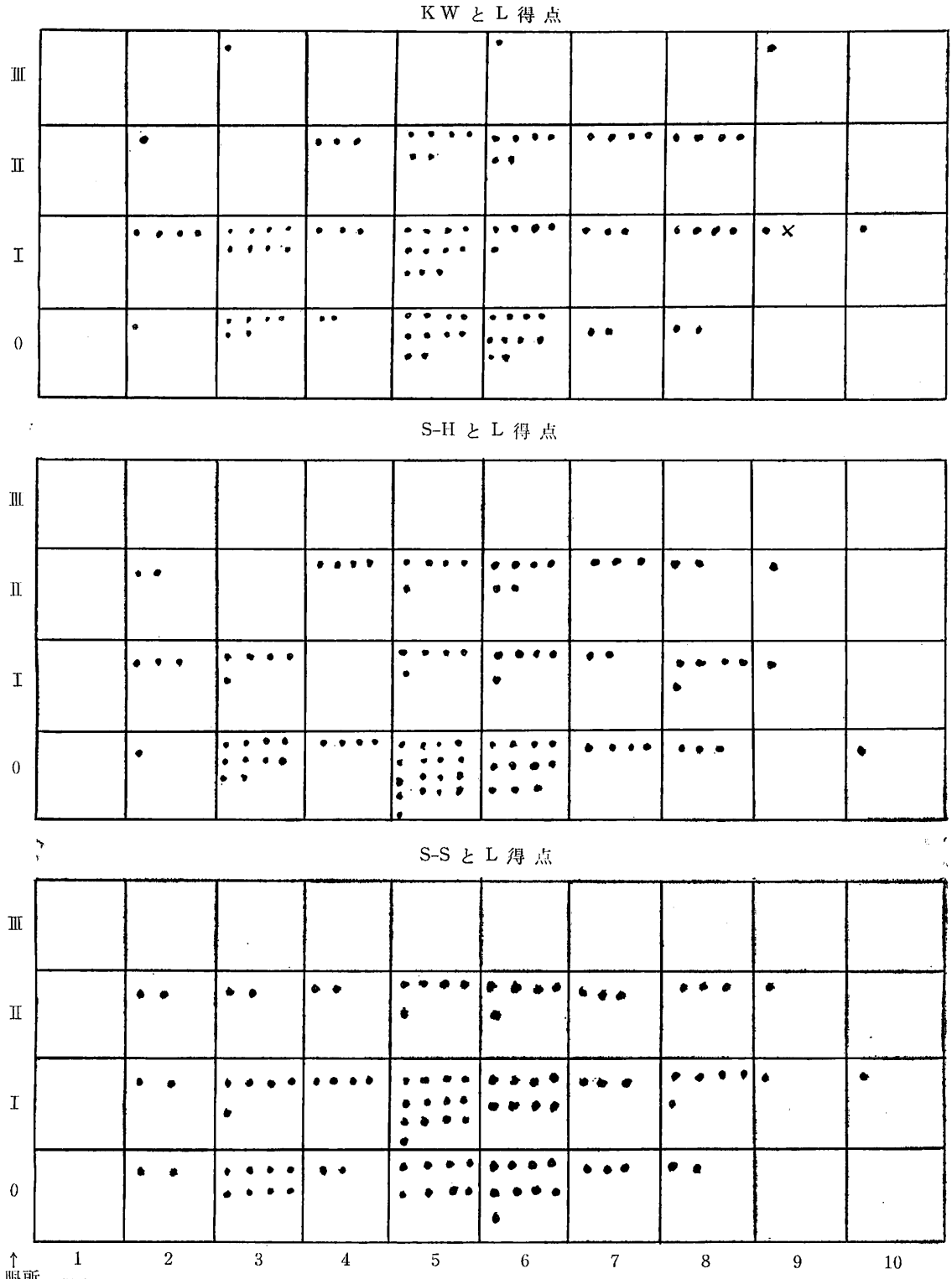

Fig. 5. 因子 L 得点と眼底所見

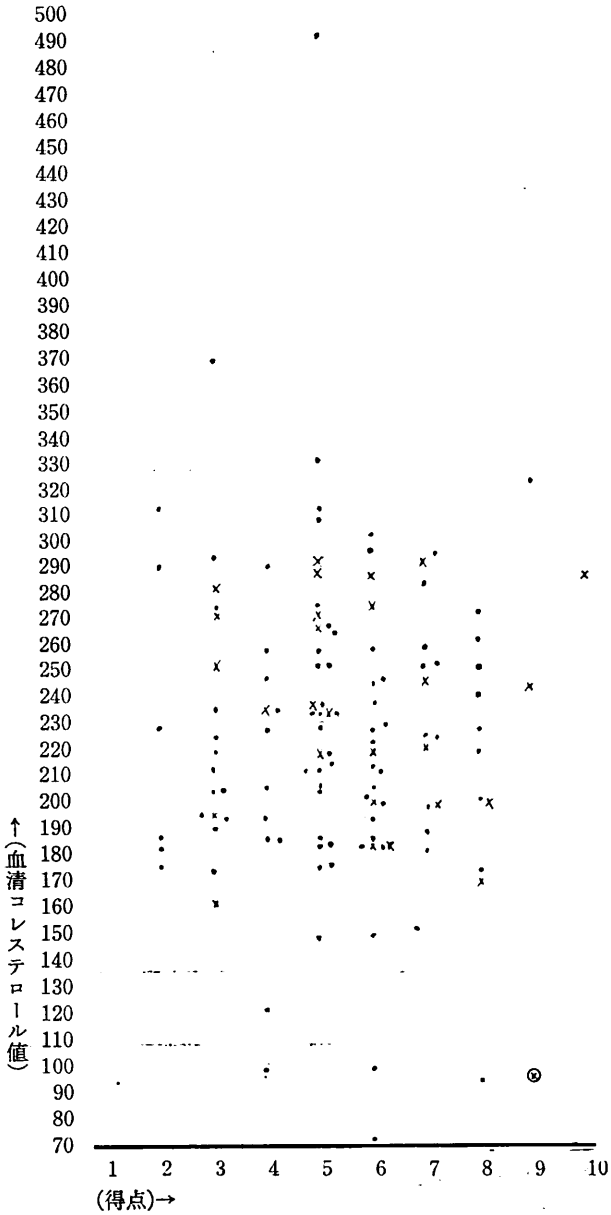

Fig. 6.　因子 L 得点と血清コレステコール値

ば，血管系を中心とする変化と不安との間には何等の関係をも認めることが出来なかった。況んや，他の因子 $Q_3(-)$，C(−)，O，Q_4 との得点と身体的変化との間にも何らの相違を認め得なかつた。

(五) 考　察

Selye, H の Stress theory of Aging に基き，一方に於て，Cattell の不安測定，Taylor の manifest anxiety scale を行い，不安を数的に捉え，他方に於て臨床的に，血管系を中心とする変化を捉えて，両者の関係を追求した所，何れの間にも，何らの関係なく，ただ Taylor の不安得点と，Scheie の高血圧所見との間に，僅かに $0.1<P<0.2$ の有意差を以て，Taylor の不安群が，高血圧症を招来する傾向があると云う結果を得たに過ぎなかった。

このことは，或る程度不安が高血圧症発症に関係あることを，示唆するものであろうと思われる。

高血圧症と不安との関係は，セリエ教授の学説以来，屢々論議され，それを支持する Wolff, H. G.[8] の研究もあるが，その反面，Fahrenkamp, K.[12] は多数の高血圧症患者の身心相関を論じ，純粋に Psychogen に発症する高血圧症の存在を疑っているし，古閑教授[12) 13)] も同様の見解をとって居られる。同教授は，白鼠に猫を使嗾する方法によって，情緒ストレスを頻回に負荷して観察し，純心理学的ストレスだけでは，高血圧症状態は生起し難いと述べ，既に高血圧症をもたらすべき因子が他に存在するときは，高血圧症状の発生を助長促進せしめるものと考えて居られる。白鼠に食塩を与え，猫を使嗾するだけで，血圧上昇傾向を示すが，正常食餌では，いくら猫を使嗾しても血圧の変化を来さないとも云う。

更に同教授によれば，身体的に既に何か器質的変化があれば，単なる情緒ストレスで容易にそれが身体的に重大な変化を起し得るが，身体が健全であれば，精神的ストレスだけでは，身体的に永久的な変化を起すことは，あり得ないと云う。

同教授の説は興味深いが，老年者は既に Aging と云う身体的変化を起して居るのであり，そこに精神的ストレスが加はるならば，身体的病的変化が招来するとも考えられる。

私の得た成績は既に述べたが，Taylor の不安測定そのものが，真の老年期不安を測定し得ないこと，更には，老年期には Aging と云う基礎的身体的変化を念頭に置くならば，老年期不安と高血圧症発症との間には，有意の相関が考えられ，引続き研究を要するものと思われる。

(六) 結　論

一方で不安を数的に捉え乍ら，他方で，血管病変を中心とする老年期の身体的変化を観察し，不安の老年期生体に及ぼす影響を追求し，ストレス学説の立場から考察

した。

む す び

私は，老年期は，青年期と同様，苦悩に満てる時期と考え，老年期の心性を，悩めるもの，として捉えるようにしたが，実は，老年期は，子供にかえる人から，素晴しい創造力を有する人まで，あらゆる段階の人が存し，この個人差の大なることが，老年期研究の大きな障碍ともなっている。

しかし，この方面の研究は，その必要性にかかわらず，未開の分野が広々と横たはっている。私は，このささやかな研究を，明日の研究への Kern としたい。

文　　献

1) 橘　覚勝　老年期　弘文堂　昭和16年
2) 橘　覚勝　老年期研究　大阪大学文学部紀要，第6巻，昭和33年
3) 橘　覚勝　臨床心理辞典　岩崎書店　1957年
4) 大脇義一　感情の心理学　培風館　昭和33年
5) Ames, L. B. et al. Rorschach responses in old age. A Hoebar-Harper book 1954
6) 額田　年　歴史から見た養生訓　雪華社　昭和38年
7) Selye, H. & Prioreschi, P. Stress theory, of Aging in "Aging; some social and biological aspect" publ. No. 65. Am. Assoc. Advancement Science, Washington, D. C. 1960
8) Wolff, H. G. (田多井吉之介訳)　ストレスと病気　協同医書出版社　昭和32年
9) 渡辺華子　福祉国家　日本労働協会　昭和38年
10) 和辻哲郎　人間の学としての倫理学　岩波全書　昭和17年
11) 入谷智定　新青年心理学　角川全書　1955
12) 古閑義之　白鼠に於ける実験的高血圧と情緒ストレス　日内誌　29, 4, 1960
13) 古閑義之　神経症とその周辺の二三の問題　日本医事新報　昭和35年4月
14) 蔵内宏和　分裂病的心性と青年期　精神医学 2 515～519　1960
15) 荒井保男　日本心理学会第 25 回大会発表論文集　早稲田大学　1961
16) 沖中重雄　老年病学の展望　日本医事新報　No. 2029　昭和38年3月